

# ケースのツボとそこに 合わさる言葉（２）

岡田 隆介

児童精神科医

今回も、「ケースのツボとそこに合わさる言葉」がテーマです。体験をヒントに創作した事例をもとに話を進めたいと思います。

## 1. 初診時の情報

初診のカルテには、家族が記入した相談カードがはさまれています。私は、それに目を通す前に簡単な家族関係図を描いて眺めます。その年齢と家族構成から、いろいろ思いを巡らすのです。

まず、来談者について考えます。通常、登場するのは家族でいちばん困っている人です。「大方のように母親が一人で来ているだろうか。小学生までなら子どもも一緒だろうな。相談内容によっては父親も一緒かも」と想像します。そして主訴です。「母親だけなら、学校での不適応だろう。子どもが一緒なら、発達障害とか知的障害の相談かな。父親が来ていたら、たとえば金銭持ち出しとか徘徊のような育てにくさの相談ではないだろうか」。最後は家族関係です。来談のメンバー構成から、主訴となっている問題の大きさ、家族のつながりがおおまかに推測できます。

こういったことは、家族が書いた用紙を見ればすむことです。それをせずに想像するのは、自分の中で家族への関心がたかまっていくからです。それによって、面接の中で尋ねたいこともはっきりしてきます。これは、家族と会う前の頭の柔軟体操です。

## 2. 診察室で

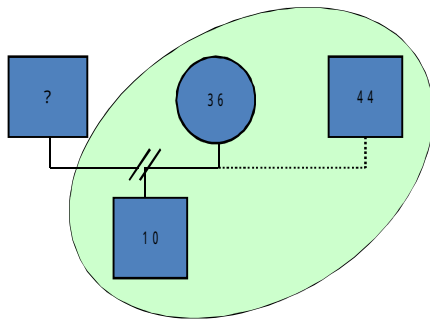
ですが、今回のケースはちょっと違う形でスタートしました。「次の人、どうぞ」と呼びかけると、顔見知りのケー

スワーカーがふてくされた様子の男の子の手をひいて入室してきたのです。後ろを見ても家族は見えません。「えっ、どういうこと？」。ケースワーカーの説明は、次のようでした。「彼は、早朝に 署の署員につれられて一時保護所にきました。原付盗および無免許運転で補導されたんです。小学生だと思われませんが、いくら名前とか住所を聞いても一切返事をしないんです。朝のラジオ体操が始まる前に無断外出を試み、どうしても家に帰ると言って大暴れしまして、そのとき腕のところをちょっとケガしたので診てもらえませんか？」「それだけ？ほんとに？」「いや、できたら名前とか聞き出してもらえたら」「やっぱり。ケガは診るけど…。どこ？ちょっと見せてね」。白衣の人間が痛いところを触るのだから、返事などするわけがありません。

「いや、精神科医ならなんでも聞き出してくれるかなと思って」、「キミらワーカーくらいだよ、やたらと精神科に来て話を聴いて欲しがるのは。不覚にも補導され、有無を言わず連れてこられて、しゃべる気になるわけないよねえ。それで、痛むのはどこ？」。と、そこにノックがありました。「話を聞いて、ひょっとしたら自分の関わっている子どもかもしれないと思って」と、別の児童福祉司が入ってきます。「どうぞ」、「おっ、B男くんじゃないか」、「あっ、先生！」、「彼は、半年くらい前に、学校から相談を受けて家庭訪問をした生徒です。間違いありません。ねえ、どうしたの？」。そして、誰もいなくなりました。

「乗り損ねた舟」みたいな気分になって、1週間後、件の福祉司をつかまえその後の様子を聞きました。彼と会ってからというもの、Bくんはすっかり一時保護所に馴染んで生活しているとのことでした。そのときに知らされたのが、次のジェノグラムです。

家族関係図



これを見ると想像癖にスイッチが入ります。「母子と内縁の男性というのは、よくある組み合わせだな。母親の結婚から離婚、そして男性と付き合う時期と経緯はどうなんだろ。20代半ばでの出産だから、経済的な理由よりも夫婦間の問題かな。親権を母親が取ったのは、どんな話し合いの結果だろ。それぞれの、とりわけ母方の実家はどのような動きをしたかな。なんとなく、Bくんはずっと父親とは会っていない気がするけど、どんな思い出が残っているだろう」。さらに想像は続きます。「いまは男性と一緒に住んでいるのかな、それとも通ってきて泊まっていくのか、あるいは母親が子どもを置いて出かけるのか。知り合ったのは、子どもが何歳の頃だろう。男性と付き合っていることを、子どもはどうみているのかな。その人について、子どもは何かを言えるのだろうか」。こういったことは、相談内容と深く関連しているはずで、母親の家族観とか将来像についても、知りたいところです。

こうして家族への関心が高まると、いろいろ確かめたくなります。とそこに、児童福祉司の声が割り込んできました。「あの、ちょっといいですか?」、「いいけど」、「実は、彼、学校で対教師暴力や器物破壊を繰り返している子どもとで、クラス担任が家族に相談を持ちかけるも連携できず困っていました。そのあたりから、自分がかかわるようになったんです。Bくんの家庭は、夜間にスーパーでパートをしている母親と、数年前から一緒に住

むようになった内縁の男性との三人家族なんですけど、実は夕べ、Bくんの口から1年くらい前よりその男性から乱暴されているという話がでたんです。そしたら、これは虐待ケースだってことになって…」

虐待という単語が飛び交い出すと、俄然、児童相談所の動きが変わってきます。それ以前は、学校からは「問題の多い困った生徒」と見られ、児相は「監護不適の教護ケース」とみていました。そして、家族はずっと学校・児相に対し距離を置いていました。ところが「虐待ケース」となって家族は一転して強硬になり、連日、引き取りを求めて児童相談所に押しかけて来ました。

子どもの心は揺れていました。当初は無断外出をしても帰ろうとしていたのに、いまは家には帰りたがらず、施設にも行かないと言い張ります。児相も揺れました。子ども言動の受け止め方が、非行チームと虐待チームでずれてきたのです。その狭間で担当の児童福祉司は、「問題は彼じゃない、大人の身勝手さだ」と一人で苛立っていました。思わず「問題って?」と彼に尋ねると、彼は「上司は虐待だから帰すわけにはいかないと言うし、家族は学校や児相への意地で手放さないと、学校はどこかに行けばそれでいいという感じで、当のBくんの気持ちはどっかに行っちゃってます」と言います。

こうなると、もう乗りかかった舟です。そこで担当福祉司を空いた部屋に誘い、二人で関係者をつなぐ糸をたどってみることにしました。

### 3. 糸のつながり

「Bくんが学校で暴れるよね、するとどうなる?」

「困った学校が、母親に協力を求めます」

「何とかしてと迫られて、今度は母親が困るよね」

「はい。口では反発しても、実際は困っていたでしょう」

「で、同居の男性にすがる」

「それしかないでしょう」

「男性は、彼なりのやり方で、つまり暴力でBくんを叱る」

「そうです。Bくんは男性には歯が立ちません」

「そこで彼は、怒りの矛先を家族にチクった担任に向け

る」  
「そして、教室で荒れます」  
「すると学校は、あれほど頼んだのにあの家族は、と苛立ちを込めてまた連絡する」  
「母親はいっそう追いつめられ、ますます男性に頼るでしょうね」  
「男性は、期待に応えようとさらに力を込めてBクンを殴る。そして、Bクンは母親からの見捨てられ感を強めながらますます学校で暴れる」  
「つまり、みんなが苛立って、怒りを膨らませながら回り続けてるってことですか？」  
「これって、やっぱり誰かが悪いのかな？この連鎖が続けば続くほどは、母親は男性を必要とし、男性は意気に感じて力でねじ伏せようとする。外圧が強くなればなるほど、男性と母は排他的に結びつきを強め、その分だけBクンは疎外感を増していく。この連鎖の一翼を、自分もしっかり担っていることにB君はぜんぜん気付いていないよね」  
「むしろ、彼自身が連鎖のエネルギー源ですよ」  
「Bクンには母親が必要だけど、Bクンが荒れる限り母親は男性のほうが必要になる。男性は、この家にいるためにBクンが荒れていることが必要だ。さてこの糸だけど、どこかが切れたらグルグル回らなくなるだろう？」  
「いままで、親子関係を調整するために男性と母親の間になんとかくさびを、とばかり思っていました。ですけど、もっと扱いやすい糸がほかにありそうな気がしてきました」

担当福祉司は処遇協議の場で糸のつながりを誼い、その結果、児童福祉司指導となりました。そして彼は学校に対し、「今後、学校内で生じた問題は児相と一緒に取り組みます。学校での処遇協議にも出向きます。ですから、家族に学校で起きた問題のすべてを伝えるのは控えてもらえないでしょうか」と提案しました。学校と母親とをつなぐ糸に介入したのです。

やがて徐々に、変化がはじまりました。私は、勝手に次のような想像をしました。学校からの苦情(連絡)が減ったことで、母親の心に余裕が生まれ 男性は悪役か

ら解放され 母親の中で男性に依存する部分が減り 男性の存在価値がやや低下し 母親のゆとりがBクンにむけられ Bクンの問題が減少し 母親は学校と児相に感謝して協力的になり Bクンは学校と家に居場所ができて …。

#### 4. ケースのツボ

このケースのツボは、Bクンと母親と男性と学校と児相をつなぐ糸です。誰もが当初、母と男性のつながりを「腐れ縁」、男性とBクンのつながりを「虐待」、母とBクンのつながりを「拒否」、学校と家族のつながりを「不信」としていました。いずれも、救い難いネガティブな糸です。担当福祉司と私は、の糸に男性への「依頼・傾斜」、の糸に男性の「見せ場・悪役」、の糸に「混乱・困惑」、の糸に「情報過多」という言葉をあてました。

最初の方は、問題とか弱みとかリスクという糸でつながっている人間関係です。後の方だと、関係そのものよりも糸のシステムに目がいきます。それが見えた(気がした)のは、一貫して離れたところに立っていたからでした。「遠くからしれっとケースを見るのも悪くないな」、本気でそう思いました。